

東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット
「多様性が生きることばの教育2025」
研修B：幼・小・中・高の学びの連続性を保障することばの教育
2025年7月6日

第2回 探究する力・自律的に学ぶ力を高める 日本語と教科の統合学習

「成長段階に応じた学ぶ力を高める
日本語と教科の統合学習」

本資料の利用について

教育・研修を目的とした利用に限ります。資料としてご利用を希望する場合は、コンテンツの出典として「利用する資料等の作成者・執筆者」「利用する資料等が作成・公開された事業名」「コンテンツが示されているウェブサイトのURL」を明記して利用してください。部分的な切り取りや加工をして利用することは禁じます。

2025年度研修B
幼・小・中・高の学びの連続性を保障することばの教育

第1回 6/8(日) …済

子どもの持てる力と経験を新たな学びにつなぐ
～初期支援と活動のアイデア～

第2回 7/6(日)

探究する力・自律的に学ぶ力を高める
日本語と教科の統合学習

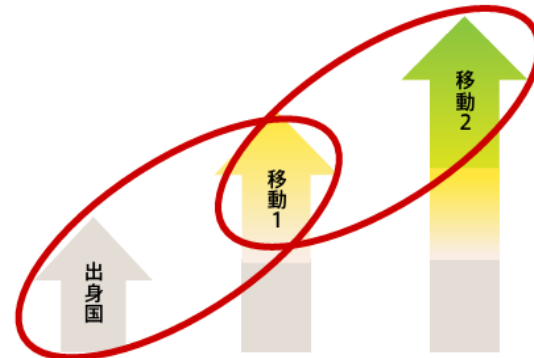
第3回 8/3(日)

アイデンティティと関係づくりを支える
～ことばの教育実践を通じて～

縦軸（年齢的発達を支える）学習の連続性
学校種間の教育を接続することが重要

縦の学びの連続性

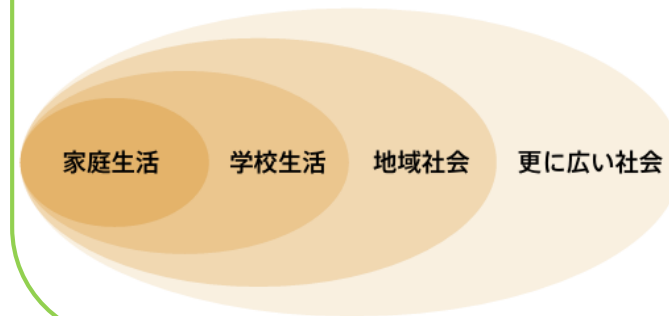
培ってきた力を、新しい学びに結ぶ



参考：齋藤ひろみ（2013）「文化間移動をする子どもたちへの日本語教育」
『月刊国語教育研究』No.490 p.17-18 をもとに作成

横の学びの連続性

子どもたちの「社会」は拡張し、複層化
社会的関係の広がりにより、学びがつながる



横軸（他者・社会との相互作用による社会化）
公的な教育とそれ以外の場の接続が重要

(1) ライフコースの視点

2 文化間移動をする子どもの学び



〈趣旨〉本ユニットHPより

日本語を学ぶ子どもたちの心身の成長発達や子どもたちを取り巻く環境をふまえながら、スムーズな学校での受け入れや指導事例、そして、幼・小・中・高等学校間の学びの連続性を重視した支援について、一緒に考えます。

本外国人児童生徒教育推進ユニットで作成した動画（参加者限定公開）の事前視聴と講義により基礎的な情報や知識を学び、実践例の報告・紹介を通して日本語指導や学習支援のイメージをつくり、ワークショップ型の活動を通して、明日からの指導・支援に生かせる具体的なアイデアを考えます。

なお、初めて日本語指導を担当することになった先生方や支援活動を始められた支援者の皆さんを主な対象として内容を構成しております。

研修で目指す資質能力について

「豆の木モデル」

外国人児童生徒等の教育を担う教員(指導員含む)の資質・能力のモデルとして文部科学省委託により日本語教育学会が構築・開発

現場の実践課題の解決には…

「捉える力」「育む力」「つなぐ力」

「変える／変わる力」という

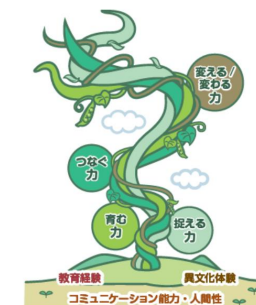
4要素の総合的な能力が必要



資質・能力の4要素と課題領域		求められる具体的な力
捉える力	子どもの実態の把握	文化間移動と発達の視点から、外国人児童生徒等の状況を把握することができる。
	社会的背景の理解	外国人児童生徒等の背景や将来を、社会的、歴史的文脈に位置付けることができる。
育む力	日本語・教科の力の育成	外国人児童生徒等の実態等に応じ、言語教育に関する専門的知識に基づいて、日本語・教科の教育を行うことができる。
	異文化間能力の涵養	外国人児童生徒等と周囲の子どもの相互作用を通して、双方に異文化間能力を育てることができる。
つなぐ力	学校づくり	保護者や地域の関係者と連携・協力して、よりよい支援、教育のための学校体制をつくることができる。
	地域づくり	異なる立場の人々と協働しながら、学習環境としての地域づくりをすることができる。
変える／変わる力	多文化共生社会の実現	社会的正義と公正性を意識し、多文化共生を具現化することができる
	教師としての成長	外国人児童生徒等に関する教育・支援活動を振り返り、自己の成長につなげることができる。

さらにア～マの「具体的な力」の記述があります

その力を持つ教員や支援者が、実際の場面で何ができるか



第2回研修 目指す「資質・能力」

第2回 7月6日 (日)	育む力 「日本語・教科 の力の育成」	コ 第二言語習得や教育方法に関する知識を踏まえ、子どもの年齢的な発達の違いを考慮した日本語や教科の指導・支援をすることができる。 サ 日本語に関する知識を生かして、子どもの日本語の力に合わせた日本語や教科の指導・支援をすることができる。 ス 子どもの日本語の力を考慮して教材等を選んだり作成したりしてリソースを準備し、学習参加を促すことができる。 セ 学校内外の生活・学習に結び付けて、日本語や教科の指導・支援、内容（教科等）と日本語を統合した指導・支援をすることができる。
--------------------	--------------------------	---

東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット
「多様性が生きることばの教育2025」
研修B：幼・小・中・高の学びの連続性を保障することばの教育
2025年7月6日

第2回 探究する力・自律的に学ぶ力を高める 日本語と教科の統合学習

「成長段階に応じた学ぶ力を高める
日本語と教科の統合学習」

東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構
外国人児童生徒教育ユニット
見世千賀子

講義のねらいと話の流れ

- 日本語と教科の統合学習（JSLカリキュラム）の基本的考え方と授業づくりのポイントを理解し、実践の手がかり
- 1 子どもの日本語教育とは
- 2 日本語と教科の統合学習（JSLカリキュラム）とは
 - （1）トピック型JSLカリキュラム
 - （2）教科指向型JSLカリキュラム
- 3 まとめ－授業づくりのポイント

子どもの日本語教育

参照：

東京学芸大学

先端教育人材育成推進育成機構外国人児童生徒教育推進ユニット（2024）

【研修用動画】初めて教える人のための 田中先生と学ぶ 子どもの日本語指導

子どもが日本語を学ぶということとは？

成長・発達過程にある子どもにとって…

ことばを獲得すること

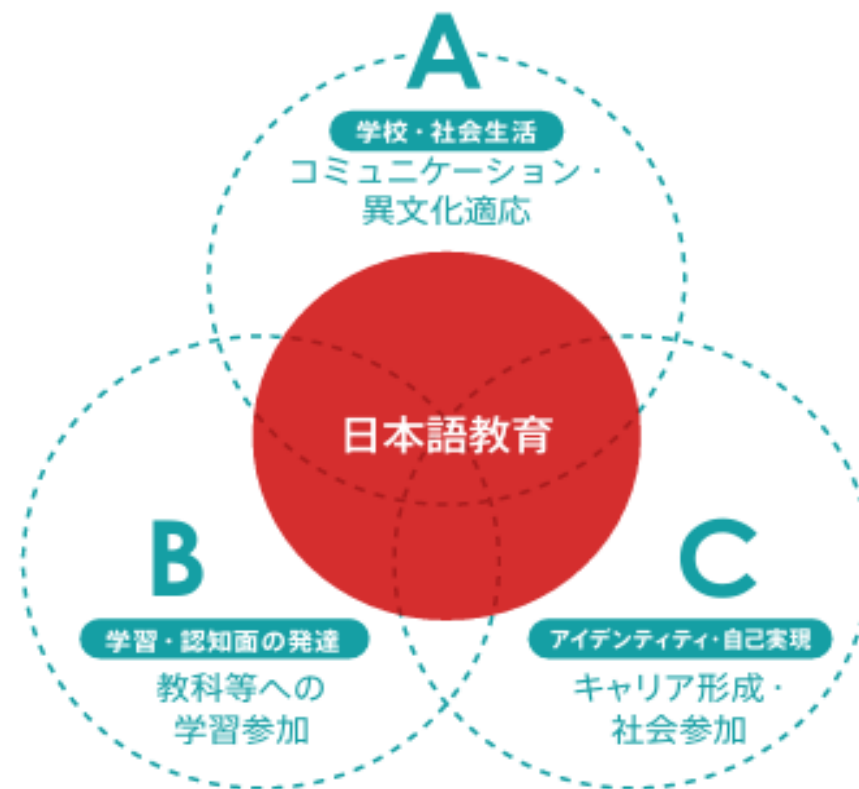
= **世界を広げ成長・発達すること**

≠ 単なる日本語の知識・技能の獲得

日本語教育

・

成長・発達を支える全人的な教育



3つの側面から日本語指導の目標を設定

子どもにどのように日本語を教えるか？ ー 日本語プログラムの組み合わせ

動画講座3より

内容 (→プログラム化)	日本語プログラム	～6か月	～1年	～1年6か月	～2年
A 生活場面の語彙・表現、会話	A サバイバル日本語	→	→		
B 日本語の発音・文字・文法などの基礎的知識・技能	B 日本語基礎 (文字・表記・語彙・文法)	→	→		
C 文章の読み・書きの技能 まとまった内容を聞く・話す技能	C 技能別日本語		→	→	→
D 教科等の学習に必要な思考を支える日本語	D 日本語と教科の統合学習	→	→	→	→
	教科の補習 (適宜)	→	→	→	→
E アイデンティティや自己実現のための活動	E 母語・母文化、交流、キャリア教育	→	→	→	→

緑：小学校低学年
黄色：小学校高学年以上

年齢による学び方・教え方の違い

個人差に留意！ 具体物・体験による学習はどの年齢でも

年齢	言語の学び方	指導の方法
幼児・ 小学1～3年	新しいことば・概念として日本語を学ぶ 日常生活の日本語使用場面でシャワーのように日本語を浴びて、その表現を場面との関係で丸ごと覚える。	文法説明は有効ではない。 身近な 具体的な場面 で、日本語に触れ、繰り返し使う活動で
小学4～6年	言語の分析が一定程度可能。 具体的な場面での使用例と補助的な説明 で意味や規則を理解。	理解した日本語を、 実際の場面や興味のある内容に関連付けて使う 活動で
中学生	言語を分析する力や 文法規則を応用して使用する 力が発達	例文と説明で意味や規則の理解を促し、その日本語を 状況に合わせて使う 活動で

高校生

学び方の違いの背景：子どもの言語習得 母語と第二言語（日本語）の関係

動画講座3より

カミンスの相互依存仮説

母語と第二言語（日本語）は深層面を共有。

深層面は小学校高学年くらいまでに発達。

母語の発達は、来日時年齢や滞日期間による。

母語の力は第二言語（日本語）の学習にも影響。



母語の役割

アイデンティティ、自尊感情、認知的発達

年齢で学び方にどんな違いがある？

法律って何？

未就学児・
小学校低学年



母語で翻訳してもわからない...

母国で未修

小学校高学年・
中学生



母語で「法律」という概念を知っていれば、
翻訳すればわかる。
母語の力を最大限有効活用。

母国で既習

学齢期で文化間移動してきた子どもたちの場合、
日本語ができないことや、日本語で学習に参加できないことと、
その子自身が持っている力は、決して同じではない

持てる日本語の力
母語の力
(英語の力)
教科学習に関する経験・知識・スキル等
多様な子どもの力
子どもの強みを活かす

教師が「法律」とは...
と教え込む授業にならないように、子どもが
主体的に活動してその
中で日本語で意味や概念
を獲得し、使えるように

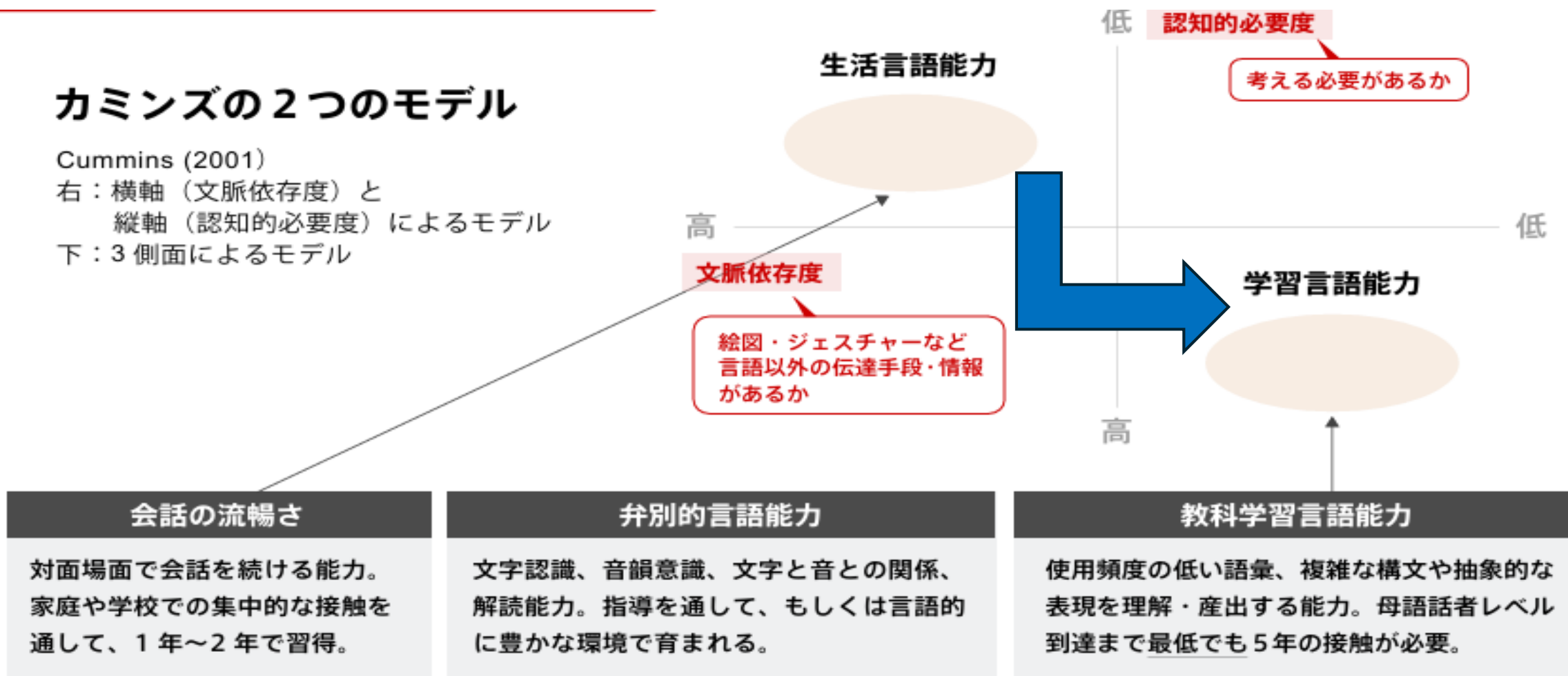
生活言語能力と学習言語能力の違い

カミンズの2つのモデル

Cummins (2001)

右：横軸（文脈依存度）と
縦軸（認知的必要度）によるモデル

下：3 側面によるモデル



日本語と教科の統合学習

なぜ日本語と教科の統合学習が必要か

- 日本語の力が十分に高まる前から在籍学級で授業を受ける子どもにとって、学習への参加が困難（お客様、全くわからない）
- 日本語で日常会話ができるようになって、教科の学習に参加することは難しい

➡ 何が難しい？

- * 日本語での「聞く話す」「読み書き」
- * 抽象的な内容の理解、理解した内容の表現
- * 場に応じた日本語を使うこと（例：丁寧語です、ます）
- * 日本の学校での学習内容、学習経験の不足
- 学習・発達の空白期間をつくらないことが重要。
 - ➡ 「日本語ができるようになってから教科の学習を」では遅い！
- 教科の学び方を学び、自律的に学習参加する力を育むことが重要。

なぜ日本語と教科の統合学習が必要か

初期指導、日常会話 ➡ ➡ ➡ ➡ ➡ 在籍学級での教科学習

「学習に参加するための成長段階に応じた学ぶ力の育成」

教科学習につながる橋渡しの支援が必要

日本語と教科の統合学習

子どもの実態に合わせて、「教科内容を扱いながら」

「日本語で考える力・表現する力」を育てる

日本語と教科の統合学習

「JSLカリキュラム」とは

文部科学省で開発

JSLとは：Japanese as a Second Language

第二言語としての日本語：生活のため学ぶために必要な日本語

- ➡ 「日本語を学ぶこと」と「教科内容を学ぶこと」を一つのカリキュラムとして構成。
- ➡ 「教科の内容」と「日本語の表現」を組み合わせさせて学ばせる
「日本語と教科の統合学習」

JSLカリキュラムの開発

- 2001年～ 文部科学省 開発事業開始

齋藤ひろみ・佐藤郡衛・高木光太郎等を中心に

1 小学校編 2003年7月

「学校教育におけるJSLカリキュラムの開発について」

2 中学校編 2007年3月

「学校教育におけるJSLカリキュラム」 ・ 文部科学省HP

文部科学省 CLARINET（クラリネット）に掲載

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001.htm

JSLカリキュラムの目的・特徴

1 JSLカリキュラムの目的

- ・日本語を母語としない子どもに
- ・「日本語で教科学習に参加するための力＝学ぶ力」を育てる

2 特徴

① 授業づくりの「ツール」

- ・多様な子どもの実態に合わせて授業を組み立てるのは指導者

② 教科・学習活動への参加を通じた学び

- ・教科内容を理解すること
- ・日本語で活動し、日本語を習得すること

③ 基本的に取り出しの授業で行う

JSLカリキュラム
二つのタイプ

トピック型 JSLカリキュラム

- 目的：教科全般に必要な「学習参加のための基礎的な力＝学ぶ力」の伸長
- 教科に共通する「学習場面」で必要となる日本語の表現を学ぶ
- 活動を通じた学びの場づくり・授業づくりのためのツール
- イメージとしては…「総合的な学習」
 - ① トピックを追及する活動
 - ② 教科学習で使用する基本的な日本語表現

} 組み合わせる

トピック型JSLカリキュラムの授業づくり

- 子どもの興味・関心、既有知識、在籍学級での学習内容などを考慮して、教科横断的なトピックを決める。
- ①体験 ➡ ②探究 ➡ ③発信
この流れで学びを体験させ学習活動に必要な日本語を織り込む。

活動（授業）の流れ	
①体験（導入段階）	トピックに関して体験したことや知識を、日本語で表現する。
②探究（展開段階）	トピックについて調べる、観察する、実験する等の方法で、新しいこと（新しいことば）を知る。学習の過程や結果について、日本語で考える。
③発信（まとめ段階）	新しく知ったこと、学習したことを、ことばで整理して、日本語で他の人に伝える。

トピック型 JSLカリキュラム

テーマ：「学校にある木」

1. ねらい

- ① 体験：校庭にある木の様子について、五感を使って調べ、表現することができる。
- ② 探究：木の様子を詳しく調べ、太さや高さ、幹や葉の形状などを記録することができる。
- ③ 発信：木について調べたことを、友だちにわかりやすく伝えることができる。



2. 活動に合わせて利用するActivity Unit（活動のまとめ）カード

（次のAUに、示されている日本語の表現を使って授業に参加させる）

- ①AU：A-2 知識を確認する 2 「知識の有無を確認する」
表現：T 「～について知っていますか。」 S 「はい、知っています。」
- ②AU：K-6 わかったことを表現する 2 「気づいたことを表現する」
表現：T 「気がついたことを話してください。～は？～は？～は？」
S 「～は～です。」

- https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/005/001.htm

参考：AU＝Activity Unit （小学校編： トピック型JSLカリキュラムより

- AUとは、小学校の学習場面で見られる「日本語で学ぶ力」を単位化し、整理したもの
- それぞれに「典型的な表現」例があります

【AU一覧表の使い方】

- AUを使い、学習活動に必要な「日本語の表現」を確認
- 子どもにとって必要な力をAUで確認し、学習活動を構成
- 日本語のねらい： どんな「日本語表現」を設定するか
- https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/004.htm

● CLARINETへようこそ

「学校教育におけるJSLカリキュラムの開発について」(最終報告) 小学校編

JSLカリキュラム開発の基本構想

1. JSLカリキュラムとは
2. 「トピック型」JSLカリキュラムと「教科志向型」JSLカリキュラム

「トピック型」JSLカリキュラム

1. 「トピック型」JSLカリキュラムの基本的な考え方
 1. 1 活動への参加を通じた学び
 1. 2 AUカードの基本構造

資料2 AU一覧(全体)

局面	NO		AU		
体験	<u>A 知識経験を確認する</u>	1	知識を確認する1	知識を確認する	1
		2	知識を確認する2	知識の有無を確認する	2
		3	知識を確認する3	経験・体験に基づく知識を確認する	3
		4	経験を確認する1	経験の有無を確認する-1	4
		5	経験を確認する2	経験の有無を確認する-2	5
		6	経験を確認する3	共有経験を確認する	6
	<u>B 興味関心を抱く</u>	1	興味を持つ1	気づきを挙げる	7
		2	興味を持つ2	興味を持ったことを挙げる	8
		3	疑問を抱く1	疑問を挙げる	9
		4	疑問を抱く2	原因・理由を追求する-1	10

AU一覧 局面:体験 A「知識・経験を確認する」

A-1 AU:知識を確認する1「知識を確認する」

よく使う言葉 → 何 思う 言う いつ だれ どこ どんな どのくらい

働きかけ・発問の表現		応答の表現
基本形	• ～は何だと思えますか。	• ～だと思えます。
バリエーション	• ～は何でしょうか。 • ～は何といえますか。 • ～は何ですか。 • いつ／だれ／どこ／どんな／どのくらい？	• ～です。 • ～といえます。 • ～は～です。 • (いつ／だれ…)です。

参考：トピック型 JSLカリキュラム (日本語表現についての注意点)

- 表現することを優先し、日本語はそのためのツールとして考える。子どもたちが学習活動の中で活性化させた経験や知識・概念、新しく習得した知識、感想などを表現することを重視しなければならない。まずは、いろいろな方法で表現できること、次に、日本語でそれをどう表現するかを学ばせる。(絵・表・グラフ・図・地図・身体表現・歌・ドラマ)
- 「体験」「探究」段階の活動中のやり取りでは「相手に意味が通じる」ことが目的だが、「発信」段階の表現は「成果を他者に向かってうまく発信する」ことが求められる。そのため、求められる日本語の表現や表現様式が異なる。この点を教師・指導者は強く意識し、細やかで適切に支援することが必要である。

教科志向型 JSLカリキュラム

- 各教科に固有の知識・概念・考え方の理解、
「学ぶ力」の育成を目指す
⇒「内容を扱いながら」でしか伝えられない
「語彙や表現方法」がある
- 各教科に特有の活動、授業展開、語彙・表現等
を、教科の内容を学ぶ中で学習する
⇒具体物や体験を支えに一学習支援・日本語支援（5つの視点）
- ねらい
教科の知識・概念等の習得 < 学習に参加するための力をつける

算数科：問題を把握する→
解決の計画を立てる→計画
を実行する→実行した結果
を検討する

理 科：課題を把握する→
予想する→観察・実験・調
査する→結果を考察する→
発表する

社会科：課題をつかむ→調
べる→まとめる

日本語支援 5つの視点 (JSLカリキュラム中学校編より)

	*	支援の視点	支援タイプ
直接支援	①	日本語や学習内容の理解を促す支援	理解支援
	②	表現内容の構成や日本語での表現を促す支援	表現支援
	③	語彙や表現の記憶を促す支援	記憶支援
間接支援	④	自分で学習する力を高める支援	自律支援
	⑤	学習への動機付けなど、情意的側面での支援	情意支援

スキヤフオールディング
(足場かけ)
の考え方で

①さらに上に
進むための足
場かけ

②一時的なも
の

③次は自分で
進めるように

理解支援

（日本語や学習内容の理解を促す支援）

言い換える	生徒が知っていることばや母語などで言い換える
視覚化する	実物、模型、絵、写真、図などを利用する。色分けして示す
例示する	具体的な例を示す
比喻を利用する	生徒が知っているものに例える
対比させる	対になることばや事柄を示す
明示する	いくつかに分割したり、重要な点だけに絞ったりして簡略化して示す
整理する	分かりやすく整理して示す
補足する	背景知識やことば、情報などを補う
関連付け	事柄の関係性（因果関係、順次性、上位・下位）などを示して理解を促す
既有知識の活性化をする	先行経験、既習知識に関連付けて説明する

表現支援

（表現内容の構成や日本語の表現を促す支援）

選択肢を示す	語彙や表現の例を示し、選ばせる
表現方法を示す	ことば以外の表現方法（絵、写真、図など）を示し、多様な方法での表現を促す
モデルを示す	文や文章レベルで、発表や作文のモデルを示す
キーワードを示す	内容に関するキーワードを示し、表現内容を構成させる
対話で引き出す	やりとりで表現したい内容を引き出し、文章化する
母語で表現させる	母語で表現させ、それを日本語で表現させる
学習した内容を分割して示す	学習した内容を分割して示し、並べ替えや選択をさせて、発表内容を構成させる
内容構成のためのシートを準備する	発表／作文の構成をシートで示し、それに基づいて内容を構成させる

記憶支援

(語彙や表現の記憶を促す支援)

内容の構成例を示す	発表／作文の内容構成の例を示し、参考にさせる
視覚化する	絵を描くなど視覚イメージに結び付けて示す
身体化する	意味を身体で表現させたり、機械的に手や体を動かす動作と結びつけたりする
音声化する	語彙や表現を声に出して、リズムカルに言わせる
物語化する	意味のある文や会話、物語の中に入れて示す。連想する関連のあることや事柄と結びつけて示す
グループ化する	トピックや使い方、類似の意味等でことばをグループ分けする
反復する	上の工夫をして、繰り返し聞かせる、言わせる、書かせる、読ませる
接触機会を増やす	上の工夫をして、多様な活動を通して新しい語彙・表現に触れる機会を確保する

自律支援（自分で学習する力を高める支援）

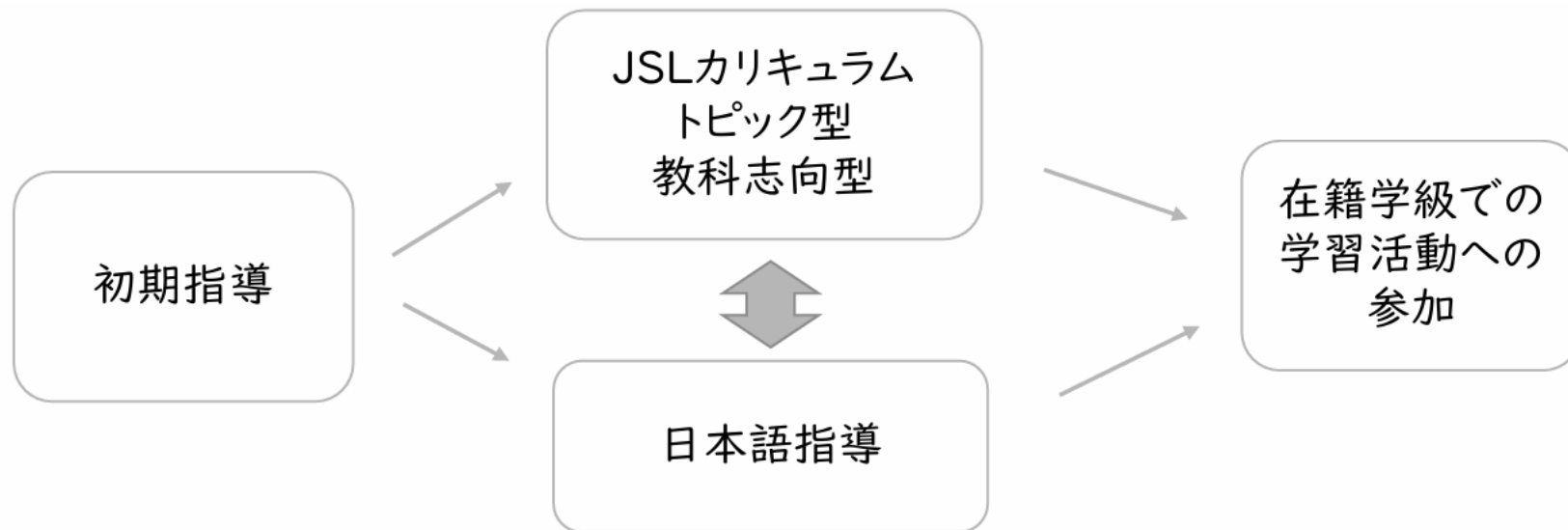
情意支援（学習への動機づけ等）

自律支援	中学生という発達の段階を考えると、自分で自分の学習をコントロールし、自律的に学習を進めていけるようになることが大切である。日本語の支援を行う際にも、生徒が自分自身で学習を進められるようになるにはどうすればよいかを考える必要がある。（自分で辞書を引く練習、周囲の人に質問する練習等）
情意支援	学習には心理的な要因が大きく関わっており、支援者は生徒の心理的側面に注意を払う必要がある。学習活動の過程で困難に陥りがちなときには特に支援者の賞賛が学習意欲を保つ支えとなり、ほめることが、次もやってみようという意欲につながる。（学習の見通し、達成感を持てるような評価の工夫等）

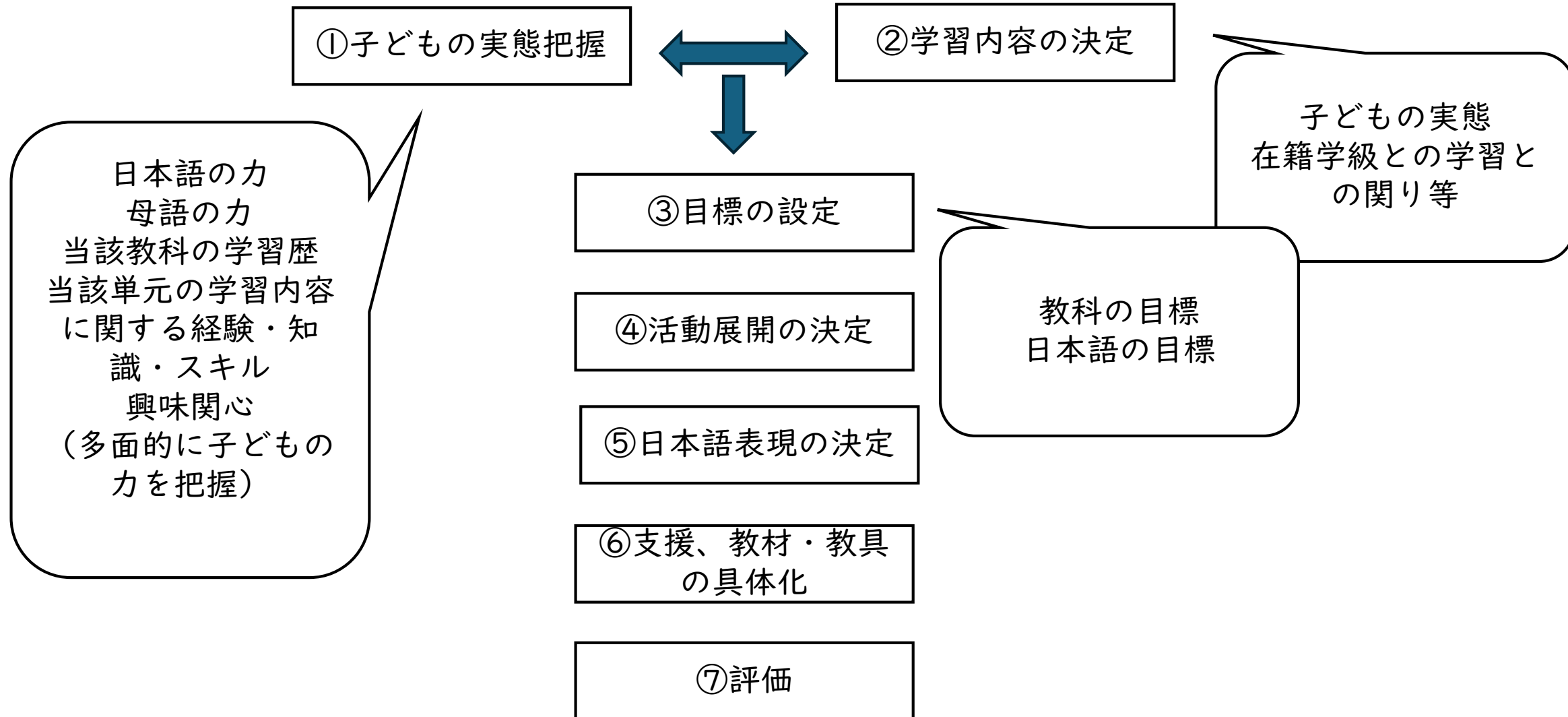
JSLカリキュラム

日本語と教科の統合学習いつ始めるか

- 初期指導を終えて、日本語での簡単なやり取りができるようになったら**できるだけ早い段階から実施**
- 初期指導の段階で利用することも可能 ➡ （実践報告）
- 子どもの実態に応じて効果的に活用 ➡ （実践報告）



授業づくりの基本的な考え方



学習内容を決定する上で 取り出しの位置づけとJSLカリキュラム

- 1 部分取り出しー（例：週〇時間、様々な教科・内容）
 - ① 先行学習型 ➡ 在籍学級での学習に参加するために
 - ② 併行学習型 ➡ 内容の補習
 - ③ まとめ学習型 ➡ 内容の復習＋補充＋確認＝定着
 - ④ 活動準備型 ➡ 「特定の活動」がターゲット
- 2 全取り出しー（例：国語）日本語教室で指導は完結

それぞれのタイプで授業の目的が異なる

部分取り出しでは、在籍学級授業担当者との打ち合わせが必要

参考：授業づくりの基本的な考え方

授業づくりの流れ	考慮する点
1 対象児童生徒の実態把握	日本語の力、母語の力、教科の学習歴、学習内容に関する事前の経験・知識・スキル、興味関心
2 学習内容の決定	対象児童生徒の実態に応じて内容を決定する
3 目標の設定	教科内容についての目標（重要な用語の選定）、日本語の目標
4 活動展開の決定	各教科の典型的な授業展開を、スモールステップで（問題解決型の授業展開に）
5 日本語表現の決定	授業内の各活動に参加するために学ばせたい日本語表現（児童生徒の発話を具体的に）
6 支援、教材・教具の具体化	理解・表現のための支援の検討、必要な教材・教具（作成する）
7 評価の対象と方法の決定	どの活動で何を見てどのように評価するか

*取り出しの位置づけ

日本語の目標をどう設定するか

小学校3年 理科 こん虫

①教科の目標

- ・ こん虫やその他の虫の体を比較する
- ・ こん虫かどうかを確認する。
- ・ 自分の考えを発表する。

②日本語の目標

他の虫と「比較」したり、こん虫かどうか「確認」したりしたことを日本語で表現できる。

③学習や活動に必要な語彙「こん虫」「からだ」「むね」「はら」

必要な日本語表現

- () は足が(6)本です。だから、こん虫です。(ではありません)
- () は、あたま、むね、はらから、できています。だから、昆虫です。
- () は昆虫ですか。はい、() は昆虫です。いいえ() は昆虫ではありません。

今澤悌「第2章JSLカリキュラムの授業づくり」東京学芸大学国際教育センター（2022）『日本語指導が必要な子どもによりそうために』

まとめ

ポイント１

子どもの実態に合わせて

- 子どもの既有知識や体験を土台に組み立てる

例：関連した内容を思い出すこと、話すことからスタート
来日前に経験したこと・学んだことに関連付けて
学習課題・活動・実態に応じて母語の力も発揮させて

- 「知っていること、話せること」から「新しいこと」へ
その子は何を知っているのか、何ができるのかという情報を持って授業を組み立てる・支援方法を考える

子どもたちの力を活かす
学びの連続性

ポイント 2 探究型の学習活動を通して

- 探究活動に参加できるように活動・リソースに工夫
見て → 気づく・わかる・確認する
やって → 気づく・わかる
具体物・体験の支えで考え・判断する
→ 抽象的な知識、概念、考え方の理解へ
思考・判断し、
自律的に学習参加
できるように
- 子どもが主体的に活動し、もっと学びたいと思うような仕掛けづくりを！

<留意点>

中学校 教え込みにならないように、学習課題の認知的なレベルを下げない、年齢相応の教科学習につながる知的刺激のある内容を

高校 日本語 ➡ 教科の学習につなげることを意識

ポイント 3

基本構造

学習のためのことばの力へ

「内容理解」から「日本語で表現」

- 理解・探究する → 理解したこと・学習成果を伝える

最後は必ずアウトプット！ 日本語で発信する

- 理解したことを言語化し、使える「知識」「力」に！

「ことば」で 「楽しかった」で終わらせない工夫を

例：今日は ～ がわかりました。（ ～が重要 ）

先行型学習 → 在籍クラスでの学習で発言、参加

在籍クラスの教科指導 でも日本語を意識して

話しことばから、書きことばへ

一般語彙（「燃える」）から学習語彙（「燃焼する」）へ

子どもが活動する中で、子ども同士や教師とやり取りすることを通して、ことばを獲得するプロセスを大切に

参考文献

- ・ 文部科学省初等中等教育局国際教育課（2003）『学校におけるJSLカリキュラムの開発について（最終報告）』
- ・ 文部科学省初等中等教育局国際教育課（2007）『学校教育におけるJSLカリキュラム（中学校編）開発最終報告書』
- ・ 佐藤郡衛・齋藤ひろみ・高木光太郎（2005）「JSLカリキュラム「解説」」スリーエーネットワーク
- ・ 川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・野山広（2009）『「移動する子どもたち」のことばの教育を創造する—ESL教育とJSL教育の共振』ココ出版
- ・ 齋藤ひろみ・佐藤郡衛編（2009）『文化間移動をする子どもたちの学び—教育コミュニティの創造に向けて』ひつじ書房
- ・ 齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子（2015）『外国人児童生徒の学びを創る授業実践—「ことばと教科の力」を育む浜松の取り組み』くろしお出版
- ・ 齋藤ひろみ編（2022）『外国人の子どもへの学習支援』金子書房